L3J

本科０期１月度

解答

Ｚ会東大進学教室

東大国語

1章

【問題】（演習）

出典…『伊勢物語』一〇七段　／　明治学院大学・改題

現代語訳

昔、高貴な男がいた。その男のもとにいる人〔＝女〕を（相手に）、内記の職にあった藤原敏行という人が求婚した。そうではあるけれど（その女は）まだ若かったので、手紙もきちんと書けず、言葉の使い方も知らず〔＝筆跡も文章も幼稚で〕、いうまでもなく歌は（うまく）詠まなかった〔＝詠めなかった〕ので、あの主人である人〔＝高貴な男〕が、（手紙の）下書きを書いて、（女に）書かせて（清書させて）（敏行のもとへ）届けた。（敏行はその手紙を見て）ひどく感心してしまった。そうして男〔＝敏行〕が詠んだ（歌）。

つれづれの……長雨で水かさの増してゆく川のように、所在なく物思いに沈んで流す涙のために水かさの増したこの涙川は、（むなしく）袖を濡らすばかりで（あなたに）お逢いする術もありません

（女の）返歌は、いつものように、男〔＝高貴な男〕が、女に代わって、

浅みこそ……（あなたの言う）涙川は、浅いからこそ袖が濡れる（だけな）のでしょう。（袖が濡れるだけでなく、あなたの）体までもが流れる（ほど深い流れである）と聞いたなら（あなたのお気持ちを）頼りにしましょう

と言ってきたので、男〔＝敏行〕は、むやみやたらと感心して、（その返歌を）今に至るまで、巻いて文箱に入れてあるということだ。

男が手紙を（女のもとに）送ってきた。（女を）手に入れて後のことであった。（その手紙で）「雨が降り出してしまうにちがいないので、（あなたのところに行きたいのですが、空模様を）見て悩んでおります。もし私の身に幸運があるなら、この雨は降りますまい」と言ってきたので、いつものように、男〔＝高貴な男〕が、女に代わって、（歌を）詠んで届けさせる。

かずかずに……（あなたが私を）深く思ってくださるのかどうか、（伺いたくても）伺えなかったので（お聞きしませんでしたが）、（雨のために出にくいとおっしゃるあなたの言葉であなたにそれほど思われていない私の）身（のほど）を知りました。（そういう

私の身のほどを教える雨が、私の涙と同じように）ますます降りつのっていることです

と（代作の歌を）詠んで送ったところ、（敏行は）蓑も笠も身に着ける暇もなく〔＝大慌てで〕、びっしょりと（雨に）濡れて、あわてふためいて（女のもとに）やって来た。

【本文改変について】

※本文中表記につきまして、以下のように修正した問題文（および解釈文）を掲載いたしました。改変は、【新古典文学大系（岩波）】に拠ります。

	【明治学院大入試問題】		【本テキスト・解答】
（5行目）	「例の男、女にかはりて、」	→	「例の、男、女にかはりて、」
（6行目）	「浅みこそ袖はひづらめ涙川」	→	「浅みこそ袖はひつらめ涙川」
（9行目）	「例の男、女にかはりてよみてやらす」	→	「例の、男、女にかはりてよみてやらす」

解答

問1　しっかりした文章を書けない女性のかわりに返事の下書きを書いてやり、それを女性に清書させて相手の男の許に届けたということ。

問2　**2**　藤原の敏行は、相手の女性からの返事を読んでひどく感心してしまった。

6　きっと雨が降るに違いないので、空模様を見て悩んでおります。

7　あなたが私を思ってくださるのかそうでないのかお訊きできないので

問3　眺・（長）雨

問4　ひち

問5　深い状態〔4字・解答例〕

問6　荒天で逢えないかもしれないと言われて嘆く女の情にほだされたから。

【問題】（自習）

出典…『伊勢物語』八五段　／　中央大学　93年

現代語訳

昔、男がいた。（その男が）子供のころからお仕えしていた主君が、御髪を剃って出家なさってしまった。（男は）正月には必ず（主君の御隠遁所に）参上した。（しかし男は）朝廷への出仕をしていたので、普段は（主君のもとへ）参上することはできない。そうではあるけれど、（男は）もとの心〔＝以前お仕えしていたときの気持ち〕を失わないで、（正月には主君の御隠遁所に）参上したのであった。昔〔＝主君が出家する前、在俗であったころ〕（主君に）お仕えしていた人が、（まだ出家していない）在俗の人も（出家して）法師である人なども、たくさん（主君のもとに）参上し集まって、正月なのでいつもと違う〔＝特別だ〕ということで、（主君が）お酒をくださった。（その時）雪は（まるで器に入れた水を）こぼすように（激しく）降って、一日中やまない。（そこにいた）人がみな（酒に）酔って、「雪に降り込められている」ということを題として、歌を詠みあった。（男が）

思へども……（主君のもとに常に伺候したいと）思っておりますが、我が身を（二つに）分けることはできないので（朝廷にも仕えなければならないので、）いつもお目にかかるというわけにはいきませんが、主君のおそばにいつまでもいられるよう（今、このように激しく降って京に帰ることができず）雪が積もるのが、私の本望なのでございます

と詠んだところ、*親王〔＝主君〕は、とてもひどく感動なさって、（褒美としてお召しになっている）御衣を脱いで（男に）賜った。

（注）＊親王――業平の仕えていた惟喬親王のことと考えられるが、業平は惟喬親王より十九歳年長なので、少なくとも「わらはより仕うまつる」云々は虚構であろうとされる。

解答

問1　D

問2　男は普段、主君の所に参上する（伺候する）ことができない。

問3　旧主への忠誠心を忘れない性格。〔15字・解答例〕
／恩顧を忘れない義理堅い性格。〔14字・別解例〕

問4　C　　問5　C　　問6　D

解説

問1　傍線部の「みぐし」は「御髪」と書き、文字通り髪のこと。それを「おろす」とは「切る」「剃る」で、「御髪（を）おろす」で出家することを意味する慣用表現。単に調髪を意味するわけではないので注意。その点から選択肢ではA・Dが正解の可能性があるが、本文後半で、この主語（主人公の「男」の主君）を「親王」といっているので、男性である。A「尼になられた」は誤り。

当時の貴族階級では仏教が日常生活にも深く浸透していて、それが彼らの発想を規定しているといってよい。単に「法」という場合もいわゆる「法律」「律令」の類ではなく「仏法」を意味するし、一般に人生の目標も、現世での栄枯盛衰にかかわらず、いずれは社会生活の第一線から退いて仏道三昧の生活を送り、極楽往生すること（あるいは解脱すること）、と意識されていた。したがって、「髪をおろす」以外にも「頭をおろす」「形を変ふ」「様を変ふ」「世を背く」「世を捨つ」「世を遁（のが）る」「世を離る」「心を発（おこ）す」など、「出家する」の意味で用いられる表現は数多い。ほかにも「家を出づ」「大事」などが出家の意味で用いられることもある。

何かの機会に代表的な表現は一通り整理しておくとよい。

問2　現代語訳の問題では、まず設問になっている部分でポイントとなりそうな語句や語法に注意し、直訳するところから始める。この場合は「え～打消」の副詞の呼応と、「まうづ」という謙譲語動詞。「え～打消」は不可能を意味し、「～できない」と訳す。「まうづ」は「まゐる」と同様、「行く・来」の謙譲表現だが、多くの場合は「行く」の謙譲語で「参上する・参内する・参詣する」などの意。そこで、「えまうでず」は「参上できない」という直訳になる。「常」という語は（現代語でもそういう意味で用いられ

るが）「日常・普段」ぐらいの意なので、全体としては「普段は参上できない」。設問に「平易な現代文に」とあるので、これに「参上できない」という述語の主語と「参上する」場所（どこに）を補う。設問部分までの段階で、登場人物は「男」と「君」の二人であること、作者は「君」には敬意を払っているが「男」には払っていないこと、設問部分の直前に「宮仕へしければ」という（『已然形＋ば」の）設問部分「えまうでず」の前提が説明されていること、などから主語は「男」であり、「男」の「まうづ（謙譲語）」という動作の対象が「君」である。したがって、「男」が「君」の所へ「普段は参上できない」、という内容で答案を作成すればよい。なお、「常」という言葉には「永遠不変」という意味もあることは語の知識として注意しておこう。

問3　「もとの心」の内容と、「失はで」が「未然形＋で（〜しないで）」の打消表現であることが、設問部分自体のポイントである。設問部分の直前が「されど」で前の「常にはえまうでず（普段は主君のもとに参上できない、**問2**解説参照）」と逆接でつながっていること、「失はで」の後ろが「まうでけるになむありける」と続くことに注意して考えてゆけばよい。つまり、普段は参上できなかったけれど、失うことなく（正月には主君のもとに）参上した「もとの心」とはどういう心か、ということ。参上した相手の「君」はすでに出家しているので、現在主従関係にあるわけではないことから考えても、「男」が「失わなかった心」とは、もとの主君に対する忠誠心、とするのが妥当。そこから、「忠誠心を忘れない」性格、あるいは「かつての主従関係を忘れない」→「以前主君から受けた恩顧を忘れない」性格、というぐらいの答えになる。

問4　「禅師」は一般的に出家した人・法師・僧侶を意味する語。したがってCが正解。B「座禅を指導する」、D「徳の高い」、E「位」が語義の上で根拠がない。また、A「禅宗」だが、普通日本で「禅宗」といった場合、鎌倉時代以後に成立した臨済宗や曹洞宗などのことをいう（禅宗自体は中国で始まる）。『伊勢物語』の成立の時期からいって答えではありえない。

僧侶を意味する語としては他に「僧正」「僧都」「律師」「阿闍梨」「大徳」「聖」「乞食」などがよく出てくる。それぞれ調べておくとよい。

問5　文法の識別問題は、正確に品詞分解をするところから始めるのが基本。「身／を／し／分け／ね／ば」で、この時点でDは不正解。「し」で一単語である場合、①サ変動詞「す」の連用形、②過去の助動詞「き」の連体形、③強意の副助詞「し」のどれかと考え

てよいが、その「し」を本文中から取り除いて、前後の意味および接続の両方ともおかしくならなかった場合は副助詞「し」と考えてよい。サ変動詞「す」を取り除いたら、何よりその文章は意味を成さなくなるし、助動詞「き」の連体形であった場合には「連用形＋し（＋連体形接続の語）」→「連用形（＋連体形接続の語）」となって、接続の辻褄が合わなくなる。「身をし分けねば」→「身を分けねば」で、接続も意味もおかしくならないので、正解はC。

問6　設問部分の直前「～とよめりければ」が「已然形＋ば」の順接の確定条件で設問部分につながっていることに気づけば簡単な問題。**問2**でも触れたが、「未然形＋ば」「已然形＋ば」の条件接続は、次に続く部分の前提条件を示している。したがって、「～と詠んだ」が設問部分の「あはれがりたまうて」の前提であるわけだから、「男」の詠んだ歌の内容をおさえているDが正解。一般に、「解釈」「内容の説明」「理由」などを問う設問の場合、設問部分のみをいくら見つめても正解にたどり着く可能性は薄い。それ以外の部分からいかにヒントを集めるか、が勝負になるわけだが、格助詞・接続助詞・係助詞はその文の構文を示す働きという点で共通し、それらの助詞の用法に注意して読むことが、よく言われる「文脈を把握する」の具体的方法の一つである。

●メモ●

2章

【問題】（演習）

出典…『増鏡』巻一「おどろのした」／オリジナル問題

現代語訳

この（『新古今和歌集』の）撰集よりも前に、千五百番の歌合を（後鳥羽院が）お催しあそばした際にも、優れた歌人ばかりをお選びあそばして（それを歌の作者とし）、和歌の道の名手たちが（判者となって、詠進された歌を）判定したところ、その（詠み手の立場でもある）まま院も判者のなかにお加わりあそばしたのではあるが、やはりこの（達人たちの）列には肩を並べがたいと御謙遜あそばして、判定の詞は記しなさらず、（御自分でわざわざ歌をお詠みになってその）御製で、優劣のお気持ちだけを御表明になったのは、かえってたいへん優雅なことでございました。

上に立つ御方がその（和歌の）道の極意に達しておいでになると、臣下たちも自然に時の流れを知（って同じ道に習熟す）るという世の習慣（によるもの）であろうか、男も女も、この（後鳥羽院の）御代に当たって、素晴らしい歌人が数多く輩出しました中でも、宮内卿の君と呼ばれた人は、村上天皇の御末裔で、左大臣俊房と申し上げた方の御子孫だから、もともとは高貴な血筋の人だけれども、官職が低いままで（祖父・父と何代か）続き、四位ほど（の位階）で亡くなってしまった人（源師光）の（そのまた）娘である。（この宮内卿の君が）まだたいそう若い年齢で、限りなく深い趣ばかりを詠んだのは、まったく滅多に見られないようなことでございました。この千五百番の歌合のとき、後鳥羽院がおっしゃるには、「このたびは、みな（優れた歌人として）世間に認められた、歌の道に老練な者どもだ。おまえ（宮内卿の君）は（経験から言えばこの席に参加するのは）まだ早いには違いないが、（歌才の面では）別に差し支えはないと思えたのでね（、特別にこの歌合の歌人に加えることにしたのだよ）。きっと（おまえを推薦した）私の面目が立つように、よい歌を詠むのだよ」と仰せられると、（感激のあまり）顔に血の気をのぼらせて、涙ぐんで控えていた様子は、この上ない和歌熱心の様子も（知られて）、可憐にみえたという。そうしてその（ときに宮内卿の君が詠進した）百首の歌は、どれもそれぞれ優

れていた中で、

薄く濃き……（ある所は）薄かったり（またある所は）濃かったりする野原の緑の若草（の色合いの違い）によって、（緑の薄いところは遅く濃いところは早かったのだと、消えた）跡までがはっきりと知られる雪のまだらになった消え方であることよ

草の緑の濃い色薄い色で、去年の古い雪の遅く消えあるいは早く消えたぐあいを推察する趣向などは、歌道に未熟な人には、ほとんど思い付きにくいであろう。この（宮内卿の君という）人は、もしも年老いるまで生きていたとしたら、まことにどんなに（素晴らしい歌を詠んで）、目に見えない鬼神〔＝死者の魂や天地の霊〕をも感動させたことであろうに、若くして死んでしまったのは、たいへん気の毒でまた残念なこと（に思われます）。

解答

問1 ①＝ひじり　②＝よわい

問2 (a)＝(ア)　(b)＝(イ)　(c)＝(オ)　(d)＝(カ)　(e)＝(エ)

問3 (1) やはりこの達人の列には肩を並べられない〈別解〉やはりこの判者の面々にはかなわない

(2) 宮内卿の君は、もともとは高貴な血筋の人だけれど

(4) 差し支えはないと思われるようなので、歌人（方人）に選んだのだ

問4 若草の色の違いから雪の消えかたの後先を推察するような、心遣いの繊細さ。

問5 宮内卿は後鳥羽院の言葉から、自分が歌の才能を認められており、歌合で秀れた歌を詠むよう期待されていると知って感激したから。

問6 歌合で詠進した和歌の出来映えを見れば、宮内卿の君は優れた歌人であったといえるのではないかということ。

【問題】（自習）

出典…『増鏡』「第二新島守」／青山学院大学　経済学部　98年

現代語訳

（後鳥羽法皇が）たとえようもなく物思いに耽りうち沈んでおいであそばす夕方に、沖の方に、たいそう小さい木の葉が浮かんでいるかのように（船が）見えて漕いでくるのを、（後鳥羽法皇は）漁師の釣り船かと御覧になるうちに、（近づいてきたその船は実は）都からのお便り（を運んできた船）であった。墨染めの御（法）衣や夜具などを、都の夜の寒さにつけて（隠岐の島はもっと寒いであろうとはるかに）御想像申しあげなさって、（後鳥羽院の生母にあたる）七条院さまから差し上げた（のと一緒に届いた）お手紙を、（後鳥羽法皇は）御開封あそばすとすぐに、まことにひどく、御胸もこみ上げる気持ちがするので、しばらく気を鎮めて（から改めてその手紙を）お読みになると、「嘆かわしいことに、このようにして（あなたと別れ別れになったまま）月日が経ってしまったこと（です）。今日明日（に死んでしまう）ともわからない（老いた私のはかない）命の（ある）うちに、もう一度、どうにかして（あなたに）お会い申しあげたいものです。このまま（あなたにお会いしない）では死出の山路も越えていけそうにもございませずに（存じます）」などと、たいそう多筆に心乱れて書いておいでになる（その手紙）を、（後鳥羽法皇は）お顔におし当てて、

たらちねの……母上（である七条院さま）の消えはてずに（私の帰京を）待っておられる露のようにはかない御身を、（無常の）風（が露を吹き散らしてしまうように母上が亡くなる）よりも前に、何とかしてお訪ねしたいものなのに

八百よろづ……数え切れないほど多くの神々もあわれと思ってください。母上が私（の帰り）を待って（一目）会おうとして、死なないでいるその（母上の）命を

（秋に飛んでくる）初雁のつばさに（手紙を結び）つける（という、前漢の蘇武が匈奴に囚われていたときの故事の）ようにしては、あちらこちらからしみじみとしたお手紙ばかりいつも差し上げるのを御覧になるのにつけても、（その手紙も後鳥羽法皇にとっては）情けなくひどい御涙のきっかけ（になるばかり）である。（壬生二品と称された藤原）家隆の二位どのは、（院宣を発した後鳥羽法皇自身も加わった）『新古今和歌集』の撰者にも御指名をたまわって加えられ、おおよそ、歌道に関して、（後鳥羽法皇が）親しくお召し使いになった人であるので、夜も昼も（後鳥羽法皇を都から）お慕い申しあげる（手紙を差し上げる）ことは限りない。あの（源氏物語

で）伊勢（にいた六条御息所）から須磨に（いる光源氏に手紙を）差し上げたとかいうのも、このようであったであろうかと思われるほどに、（手紙をたくさん）巻き重ね、（長々と）書き連ねてお送り申しあげている。（そのなかのひとつに、）「和歌所（に伺候しておりましたころ）の昔の面影が、一つ一つ忘れがたくて」などと申しあげて、「つらい命が今日まで（永らえて）あり（続け）ますことが恨めしい」ということなど、何ともいえず胸を打つことが多くて、

ねざめして……（明け方一眠りした後に）目が覚めて、聞かないのに聞いたように感じてつらくてならないのは、（後鳥羽院がいらっしゃる隠岐の）荒磯（にうち寄せる）波の夜明け前の音（であることよ）

と（書かれて）ある（歌）を、法皇もたいそう（悲しい）とお感じになって、（涙に濡れた）御袖をひどくお絞りあそばす。

解答

問1 (a)＝(ウ)　(b)＝(エ)　(c)＝(ウ)

問2 (イ)

問3 たらちね（の）

問4 (ウ)　**問5** (ア)　**問6** (エ)

問7 (イ)　**問8** 命　**問9** (エ)

解説

問1 敬語にこめられる敬意の方向性については、次のように考える。

① 敬意を発する主体（だれからの敬意か）

1 地の文中の敬語……作者（本問の選択肢においては「語り手」と表現されている）

2　会話文中の敬語……その発言の話し手

②　敬意の対象（だれに対する敬意か）

1　尊敬語……行為の主体（その敬語の主語となる人物）

2　謙譲語……行為の客体（その敬語の連用修飾語となる人物）

3　丁寧語……会話・消息の相手

(a)　右の①は1となり、語り手からの敬意である。また、(a)は《謙譲語補助動詞》だが、その補助する具体的な行為は「思ひやり」と表現されている。これは「離れたところのことを思う」といった意味だが、その前に「都の夜寒さに」とあって「都の夜が寒いことにつけても」と言っているのだから、都にいる人物の行為であり、その対象は都から離れている人物である。したがって、ここは主体が「七条院」、客体が「後鳥羽法皇」となるので、②は客体である後鳥羽法皇を採る。（なお、「夜寒さを」となっていれば、「都のことを思いやる」のだから、主客が逆転することになる。）

(b)　これは(a)に続くのだから、①が1となるのも同様である。また《尊敬語補助動詞》であって具体的行為は(a)と同様に「思ひやり」なので、右に見た主客の関係に鑑みて、②はこの部分の主語となるべき七条院を採る。

(c)　ここも地の文中なので①はやはり1となる。②は、これが(a)と同様に《謙譲語補助動詞》だから、直前の「恋ひ」という行為の客体を確認する。10行目から、主体が「家隆の二位」であることは明らかだ。その「恋しく思う」対象は、ここではもちろん女性ではない。10～11行目に「新古今の撰者にも召し加へられ……むつましく召し使ひし人なれば」とあることから、撰集にあたって恩義をこうむった後鳥羽法皇を恋しがっていることになるのだ。

問2　傍線部を品詞分解すると、「浮かべ」が《バ行四段活用動詞「浮かぶ」已然形（命令形とする説あり）》で、「る」が《存続の助動詞「り」連体形》である。

古語動詞の活用においては、活用して「エ段音＋る」の形になることはない。「エる」を見たら、右のように《四段動詞已然形＋存続「り」連体形》だと思ってよい。（もともと終止形で「エる」の形を持つ動詞、たとえば「帰る」・「蹴る」などは除く。）なお、「アる」の形は《自発・可能・受身・尊敬》の「る・らる」の接続において現れる。詳しく言えば、四段・ナ変・ラ変すなわ

ち《未然形がア段音で終わる動詞》には「る」が続き、そうでない場合は「らる」が続く。

問3　母子関係を直接的に示す表現は見られないが、和歌の中に使われている枕詞が「母」を導く「たらちねの」なので、これを採る。ただし、7・8行目に見られる二首の歌に使われた「たらちねの」は、どちらも「母」を導いてはおらず、それ自体が後続の表現に対する主語となっているので、「たらちね」が「母」の意味で用いられ、「の」は《格助詞（主格）》となっていることになる。したがって、解答は「たらちね」だけでも可とする。

これにかぎらず、「草枕」が「旅」を意味するように、枕詞は本来その導くべき名詞の代わりに用いられることがある。さらに、「枕とて草ひきむすぶこともせじ」が「もう旅は終わりにしよう」といった気持ちを表現することさえある。代表的な枕詞三十～五十程度は、その導くことばと一緒に憶えておく必要がある。

問4　古語「ためらふ」は、現代語の「躊躇する」の意味をもたないわけではないが、もともとは「昂ぶった感情を抑えようとする」ことをいい、「募ろうとする病勢を抑えようとする」ことにも使われた。前者の意味が否定的に用いられると現代語につながってくる。

これを知らないとすれば、直前の《順接確定条件表現》「御胸もせきあぐる心地すれば」すなわち「胸がぐっとこみあげてくる」心情をもとにしながら、現代語の意味に近いものを選ぶよりない。「感情が高ぶった」→「ややためらひて」→「手紙を読む（ちなみに、古文では「黙読する」ことは「読む」でなく「見る」という）」という流れなのだから、(ア)か(ウ)にしぼれるだろう。「しり込み」では現代語と同じで設問にする意味がないし、「涙」を意味する言葉はない。さらに、「ためらふ」が心情語であろうと推定すれば、「時間」より「気」を問題にしている方がよいだろう。と、いちおうはこのように考えられるが、古今異義語が常にこのように心情なら心情に関するもの同士であるとは限らず、なかにはずいぶん意味の離れたものもある。やはり基本的な語義はおさえておきたい。

なお、現代語の「ためらう」の意味に用いられる古語としては「やすらふ」がある。これなどは現代語とは語感が相当違っていることだろう。辞書で確認のこと。

問5　「ながら」は、接続助詞なのに非活用語にも接続する点で珍しいものである。ふつうに動詞などに接続するときは一般に《逆接》を示すが、これが副詞や名詞に接続すると「そっくり～のまま」といったニュアンスでさまざまに訳される。辞書で用例を確認しておくことを勧める。

右のことから、選択肢中にこの「ながら」を正確に訳しているものを求めると、この段階で㋐しかない。

問6　各選択肢前半で、関心の対象となる人物が異なっている。ところがこれは和歌の一節なので、歌全体を見ればたやすくわかることだ。この傍線部を含む歌の冒頭には「露の身」の持ち主が「たらちね」と表現されているので、まずこの段階で㋒・㋓に絞り込むことができる。次に、傍線部に含まれる文法事項として「いかで～まし」に注目する。副詞「いかで」には《疑問・反語・願望》と、大きく三つの用法がある。ところが、「まし」は「む」よりも消極的な推量・意志を示し、この消極性のゆえに《反語》にはなりにくい。したがって、文末が反語表現になっている㋒よりも㋓がよい。

なお、この「まし」は《反実仮想》の用法ではない。《反実仮想》とは、仮定条件に対する帰結に「まし」が用いられた場合を言う。ここでいう仮定条件を示す代表的な形に「ましかば・ませば・せば」などがあるのは知っていることと思うが、このほかの形でもとにかく仮定条件になっていればよい。「～むに～まし」や「（終止形）とも～まし」なども《反実仮想》になる。ところが、問題の和歌には仮定条件が含まれていないので、「まし」は単に《実現不可能を懸念しながらの願望・意志》といった用法になっているのである。

問7　傍線部以前には《係助詞》「こそ」が見られないので、「あはれめ」は四段活用動詞の《命令形》である。これで選択肢の文末表現だけを見て㋑・㋔に絞れる。あとは動詞の部分の解釈になるが、「示現してお会いください」なら「会ふ」に《尊敬》助動詞を付けた形を命令形にした形になっているはずで、これは「会はれよ」となるはずだ。（「れ」を《尊敬》助動詞未然形と見ることはできるが、助動詞「む」に命令形はない。）したがって正解は㋑で、「憐れめ・哀れめ」などの漢字を当てて解釈することになる。

問8　「玉の緒」は、本来は字義どおり「宝石を連ね止める紐・糸」を意味した。しかしこれが「細く短い」ことから「ほんの僅かの時間」といった意味を経て、「生命」の意味に用いられるようになった。歌語としての「玉の緒」はまず「命」と考えてよい。

ただし、「玉の緒の」となると枕詞としても使われる。さまざまな語を導くので、辞書を読んで確認しておくことを勧める。

問9　『伊勢物語』を選ばせようとする引っかけ問題だろうが、こんなのに引っかかっては恥ずかしい。「伊勢」の地名は、ここにある「神宮」が皇室の祖神とされた天照大神を祀ることから、さまざまな作品に見られる。ところが古典文学において「須磨」といえば、これはもう光源氏の流離の地として有名で、大学入試レヴェルでは「須磨・明石＝源氏物語」という図式がなりたつといっても過言ではない。

3章

【添削課題】

出典…『源氏物語』「明石」の一節　／　國學院大学　文学部　00年

現代語訳

（源氏は京の自邸である）二条の院にご到着になって、都の（源氏の明石からの帰りを首を長くして待っていた召使いの）人々も、（明石まで源氏について行っていた）御供の人も、夢のような気持ちで再会し、嬉し泣きも縁起でもないほどまでに大騒ぎしている。紫上も、（生きていても）どうしようもないとすっかりあきらめていらっしゃった命を、（今まで生き永らえて再会できたことを）嬉しくお思いにならずにはいられないであろう。（紫上は）たいそう愛らしげで、大人びて（容姿も）整い、（お留守の間の）ご心労のために、豊かすぎて扱いかねるほどであったお髪の、少し落ちて細ったのがかえって、たいそうすばらしいのを、（もう）これからはこうして（一緒に）暮らせるのだと、（源氏は）ご安心になるにつけても、また、あのいとしくてたまらないまま別れてきた人〔＝明石の君〕の、（悲しく）思っていた様子が（源氏には）痛々しく思い出されなさる。（源氏は）やはり、いつになっても変わらず、こうした方面〔＝恋の道〕で、お心の休まる暇のないことであるよ。（源氏は）その人〔＝明石の君〕のことなどを、（つつみ隠さず紫上に）お話し申し上げなさる。（源氏が明石の君のことを）思い出していらっしゃる御様子が並々でなく見えるので、（紫上は）穏やかでない気持ちで拝見なさるのであろうか、さりげないふうに、「*身をば思はず」などと、それとなく（嫌味を）おっしゃるのを、（源氏は）しゃれていてかわいらしいと思い申し上げなさる。（こうして）ちらりと見るだけでさえ（いつまでも逢っていたい思いのするほど）魅力的な（紫上の）御様子を、どうして長い年月逢わずにいられたのだろうかと、（源氏は）信じられないような気がなさるにつけても、（今さらながら須磨退去の昔に）たちかえると、世の中というものがたいそう恨めしく思われるのであった。

＊忘らるる身をば思はず誓ひてし人の命の惜しくもあるかな＝あなたに忘れられるわが身のことは案じもしません。（しかし）神仏に

誓って（愛を）約束したあなたの命が（誓いを破った罰が当たり失われないかと）惜しまれます。

この歌は『拾遺集』恋四・右近の歌で、後世『百人一首』にも入集した。

解答

問1　都で源氏の留守を守っていた人びとや明石から戻った源氏の供人たちが、互いの再会を信じられないような気持ちで帰京の喜びに沸き立っている光景。

問2　**2**　今はこうして魅力的な紫の上の姿を見ることができるのだなあ

〈別解〉今はこうして紫の上と一緒に暮らすことができるのだなあ

6　源氏は紫の上を気が利いていてかわいらしいと思い申し上げなさる

問3　恋愛関係にある女性それぞれへの配慮で、源氏の気が休まる暇がないということ。

問4　(ア)

問5　源氏の身の心配ばかりしていた自分の気持ちも知らないで、流謫先で別の女性と契った源氏を恨む紫の上の心情。

【問題】（自習）

出典…『源氏物語』「明石」　／　広島大学　98年

現代語訳

（京への御出発が）明後日というほどになって、いつものようにはあまり夜更けを待たずに、（源氏は明石の君の所へ）お出かけになった。はっきりとはまだ御覧になってもいない（明石の君の）御容貌などが、（今夜は最後だとよくよく御覧になると）たいそう由緒ありげで気品のある様子に感じられて、（源氏は）「意外にも目を引く（人）であったのだなあ」と、このまま残し（て帰京し）にくく、（別れてしまうことが）残念に思わずにはいらっしゃれない。（源氏は）「しかるべき様子に（準備を）して、（京に）迎えよう」と思うようにおなりになった。（そして）そのとおり（京に迎え入れることを明石の君に）お話しかけになり、お慰めになる。

男〔＝源氏〕の御容貌や御姿は、やはり改めてあれこれ言うまでもなく（優美で）、数年来の御勤行でたいそう顔つきもほっそりとやつれておいでになるのもまさに、（かえって）言いようがなくすばらしい御様子で、（拝見していても）胸が痛くなるような様子でちょっと涙を浮かべ浮かべしては、情愛も細やかに（明石の君と将来を）約束していらっしゃる（御様子）は、（明石の君からすれば）「ただ単にこれほど（の素晴らしい男性にこのような約束をしていただいたこと）を幸せだと思って、どうして（源氏に対する）気持ちがおさまらないでよかろうか（、いや、源氏が京に戻ることによって源氏との関係が終わってしまうことも諦めなくてはならないのだ）」とまで思われるよう（な気がするの）だけれども、（源氏のあまりの）すばらしさだけに、自分の身分の程度（が地方に土着してしまった豪族の娘であり、都人でしかもかつては皇子であった源氏に比べると取るに足らないものであるということ）を考えるのだが、（やはりそのつらさは）尽きない。

波の音も、秋の風（の中）にはいっそう響きが格別（寂しさを感じさせること）である。海水を煮て塩をつくる煙がほのかにたなびいて、（悲しさのもとになるものを）ひとつに集めた（ような、この）場所の情景である。（源氏が）

このたびは……たとえ今回の（私が帰京する）旅では別れ別れに立ちのぼるとしても、藻塩を焼く煙は（いつかは）同じ方向に流れてゆくだろう（、それと同様に、また後で一緒になろう）

とおっしゃると、（明石の君が）

かきつめて……かきあつめて海辺の人々が焚く藻のような（、その焚き火と同じように私の心の中も燃えるような）思い〔＝思ひ＝火〕で（一杯ですが）、今は言っても仕方のない（ことですから）恨むことさえいたしますまい（、まして都にお迎えいただけるなどという分不相応の望みを持つことは諦めています）

（とお答えする様子は、）しみじみと泣いて、口数が少なくなりがちのものではあるが、それ相応の表現の御返歌などは、気持ちを込めて申し上げる。この（源氏が）いつもお聞きたがりになる琴の音などを、（明石の君が遠慮して）まったくお聞かせ申し上げなかったことに、（源氏は）ひどく愚痴をおこぼしになる。（源氏は）「それ〔＝あなたが琴を弾いてくれない〕ならば、せめて（お別れの）形見として思い出になるくらいの一節だけでも（私が弾こう）」とおっしゃって、京から携えていらっしゃってあった琴の御琴〔＝七弦の琴〕を（身の回りの世話をする者にお命じになって）取りにおやりになり、すばらしい調べをほんの少ししか掻き鳴らしていらっしゃらないのだが、（その）深夜の澄んだ（空気に琴の音が響いている様子）は、たとえるような方法もない（ほどにすばらしい）。（明石の君の父である）入道は、（この源氏の弾く琴の音のすばらしさに）我慢できないで、箏の琴〔＝十三弦の琴〕を取って、（明石の君も相和して弾くようにと御簾の中へ）差し入れた。（明石の君）自身も、いよいよ（源氏の演奏のすばらしさに）つい涙までもうながされてしまって、（その涙を）とめるようなすべもない（こと）に（自然と演奏を行う方へと心が）誘われるのであるに違いない、静かに合奏している弾き方は、たいそう貴人らしく見えている。

入道の宮〔＝藤壺中宮〕のお琴の音を、ただ今の世で二つとない（ほどすばらしい）ものと（これまで源氏が）お思い申し上げていたのは、（その琴の音が）いかにも華やかに現代的な感じで、ああすばらしいと聞く人の気持ちが満たされて、（奏者の）顔かたちまでも（どんなに美しいことかと）想像せずにはいられないことは、まことにこの上なく高貴な御琴の音である。（それに対して）これ〔＝明石の君の琴の音〕は、どこまでも乱れなく澄んだ（音色で）弾き、奥ゆかしくねたましいほどすばらしい音色が優れている。この〔＝音楽の道にも堪能な源氏の〕お心にさえ、（その音の冴えは）珍しく思われて、しみじみと慕わしく心ひかれて、まだ（源氏が）聞き慣れていらっしゃらない曲などを、（聞く人が）物足りなさにちょっといらだつ感じで途中で何度も弾きやめて、（源氏は）満ち足りなく感じずにはいらっしゃれないのにつけても、「この何ヵ月来、どうして無理に（弾かせて）でも（この琴の音を）聞いて耳慣れないままにしたことだろう（、いつも聞いておけばよかったものを）」と、今さら残念にお感じになる。（そのせいか、）思う存分、先々の約束をしてばかりいらっしゃる。（源氏は）「琴は、また合奏するときまでの形見に（あなたに預けていこう）」とおっしゃる。女〔＝明石の君〕は、

なほざりに……気まぐれなお気持ちで（私を）あてにさせたままでおくような一言といっしょにこの琴を（お残しになりましたが、この私はこの琴の）尽きない音に（あなたさまの一言を心に）かけてお慕いしてゆかなければならないのでしょうか

（という）つい口からこぼれた一言を、（源氏は気持ちが通じないのが）不満にお思いになって、

「逢ふまでの……（再び）逢うまでとお互いに約束した関係の形見として残す琴の絃の調子は今と変わらずにいてほしい（、それと同様にあなたの胸の中の気持ちも変わらずにいてもらいたいものだ）

この音が狂わないうちに、必ず会おう」と（再会を）あてにおさせになるようだ。けれども、こうしてまさに別れるような時のやるせなさを我慢できないと思って（明石の君が）むせび泣くのも、本当に道理なことである。

解答

問1
・見棄てがたく、口惜しう思さる　（2行目）
・うち涙ぐみつつ、あはれ深く契り給へる　（5行目）
・心の限り、行く先の契りをのみし給ふ　（21行目）

問2　**光源氏**＝男（4行目）　／　**明石の君**＝女（21行目）

問3
(1)　ただこれほど立派な男性の寵愛を受けたことだけを幸せと思ってでも、源氏への思いはどうしておさまらずによかろうか、これで諦めなければならない。〔69字・解答例〕
(2)　わが身の程（6行目）

問4　あなたに預けていきましょう。〔解答例〕

問5　①＝光源氏　②＝明石の君　③＝光源氏　④＝明石の君

問6 (1) 光源氏の言動を尊敬語で待遇しているのに対して、明石の君の言動は尊敬語で待遇していないという違い。〔48字・解答例〕

(2) 光源氏は上流階級に属するが、明石の君は上流階級に属さないという身分差の暗示を意図する意識。〔45字・解答例〕

問7 容貌など、いとよしよししう気高きさまして（1～2行目）

いと上衆めきたり。（15～16行目）

問8 (ア) 数年来の御勤行

(イ) お聞きたがりになる琴の音

(ウ) 物足りない感じで

解説

問1 前もって設問を確認して、該当部分に印でも付けながら読まないと、時間を無駄にする。設問から、ポイントは次の三点。すなわち、

(a) 源氏の意思・言動であること。

(b) 明石の君に対する意思・言動であること。

(c) 文中から抜き出した際に、「愛情」が次第に「高ま」るようにすること。

念のため、右の(a)・(b)の両方に該当するものを順に抜き出してみよう。

1 「めざましうもありけるかな。」と、見棄てがたく、口惜しう思さる（2行目）

2 「さるべきさまにして、迎へむ。」と思しなりぬ。さやうにぞ、語らひ慰め給ふ（3行目）

3 心苦しげなる気色にうち涙ぐみつつ、あはれ深く契り給へる（5行目）

4 このたびは……とのたまへば（8～9行目）

5 この常にゆかしがり給ふ物の音など、さらに聞かせ奉らざりつるを、いみじう恨み給ふ（11～12行目）

6 「さらば、形見にも偲ぶばかりの一ことをだに。」とのたまひて（12～13行目）

7　この御心にだに、……飽かず思さるるにも、……悔しう思さる（19～21行目）

8　心の限り、行く先の契りをのみし給ふ（21行目）

9　「琴は、また掻き合はするまでの形見に。」とのたまふ（21行目）

10　「逢ふまでの……必ずあひ見む。」と頼め給ふめり（24～25行目）

さてこれらのうち、2は1の直後にあって2の行為の原因が1の心情だと考えられるから、「愛情」という心情に直結する物として1を残して2を捨てる。

3は源氏その人の描写の後あらためて述べられた部分だから、とりあえず残しておく。

4は直前にその場の風景が述べられているため、その風景に触発されての歌であることになるが、ということはそれ以前の心情そのものには大きな変化はないと考えてよく、これも捨てる。

5は確かに「別れの無念」に由来する心情だろうが、直接的には否定的な言葉で表現されているから、「高まり」を言うには相応しくない。

6も「形見」などという言葉だけを抜き出すと、あたかも別れを素直に受け入れたかのようにもとれて相応しくない。

7は5と同様。

8は明石の君への愛情が素直に現れたものと見て残す。

9は6と同様。

10は8の心情に由来するものと見てよいが、同じ心情からのものならば簡潔にまとまっている8を採るほうがよいだろう。

したがって残ったのは1・3・8の三つ。このうち1の前半は「愛情」の内容を具体的に示しただけの引用部である。また3の「心苦しげなる」は「第三者から見ても」の意を汲み取って解釈すべき部分で、源氏の言動を直接的に表現したものではない。そこでこれら二点を除いて模範解答としたが、これらは解答欄が十分に大きければ削らなくとも減点対象にはならないだろう。

問2　これも前問と同様に、先に設問に目を通して、該当部分を見つけたらチェックしながら問題文を読むべきである。括弧書きの「**(源氏)**」・「**(明石)**」は設問者による註なので、原文にはなかったのだから、ここでのチェックの対象とはならない。しかしこれらを除けば、源氏および明石の君を示す呼称としては、「男（4行目）」と「女（21行目）」しかなく、あとはすべて代名詞である。（源

氏＝「この（11行目・19行目）」／明石の君＝「わが（6行目）」・「みづから（14行目）」・「これ（18行目）」）

したがって「男」・「女」しか採りようもないのだが、そもそも「男」・「女」というのは、身分の違いの甚だしい二人を生身の個人どうしとしての男女と見た表現であり、その意味で「恋愛物語の主人公」という設問指示にも合致していると言えよう。

問3　(1)　現代語訳の基本は原文の語順に忠実な逐語訳であり、これに制限字数の許す限りの説明を加えて答案とすべきである。そこでまず傍線部を品詞分解すると、「ただ（副詞）＋かばかり（副詞）＋を（助詞）＋幸ひに（形容動詞）＋て（助詞）＋も（助詞）＋などか（副詞）＋やま（動詞）＋ざら（助動詞）＋む（助動詞）」となり、したがって逐語訳は「ただこれだけを幸せとしてでも、どうして終わりにならないだろうか」程度となる。

右のうち、最も大きな構文上の注意点は、後半の《反語》である。「など」はそれだけで《疑問の副詞》であるが、《係助詞》と同じ「か」で強調されており（二語に分割して見ても構わない）、また傍線部の後の逆接を経ての「（思いは）尽きせず」との関係上、傍線部はとりあえず「思いが尽きる」ことを表したものと見るべきであり、《反語》表現と判断する。《反語》とは形式上の《疑問》によって《否定》の真意を表現したものなので、入試問題の答案としては《否定》表現を打ち出すことが要求され、一般には字数制限が厳しいことが多いので、そのような場合は形式疑問をカットして明確に否定文で訳しておくことが勧められる。しかし本問では「七十字」とかなりゆとりがあるので、文末を否定にしておく限り、もとの疑問文型も活かしてよいだろう。

あとは他に補うべき要素を文法的に確認してゆく。

まず冒頭の「かばかり」には指示語「か」が含まれるので、その指示対象を明示する必要がある。明石の君にとって「幸せ」だったのは「源氏の愛を得たこと」である。ただし、「源氏」という固有名詞ではその愛が幸せに感じられる説明として弱いので、「立派な男性」のように「源氏」の性質の説明を優先するほうがよい。

また、「やむ」はここでは四段活用しているから《主語》があれば意味が完結する。原文中に「やまざらむ」に対する主語は表現されていないので、これを補う必要がある。（下二段なら他動詞で《客語（＝直接目的語）》も必要となる。）ここで「源氏の愛を得たこと」によって「止む」べきことといえば、問題文に先立つ説明から「別れの悲しみ」程度となり、この「止まざらむ」は（ここまでのところでは）「気が済まないことがあろうか、気持ちも落ち着くはずだ」といったニュアンスで用いられていることになる。

あとは三点を具体的に答案に盛り込んで行くのだが、その際に設問指示「明石の君の気持ちがよくわかるように」とあることを思い出そう。前にも見たように、傍線部より後には逆接を経て「（思いは）尽きせず」とあるのだから、傍線部はいったん「諦め」を意味したものと考えて、これを明確に出したい。後で「諦めようにも諦めきれない」というための前提として、「諦めなければならない」程度に強く訳しておくと、明石の君の苦渋がよくわかる答案になる。

(2) 要は、明石の君は源氏を諦めようとしているわけだ。「その理由になる自己認識」とあるが、そもそも文中に明石の君の「自己認識」として読める部分は傍線部に続く「わが身の程」しかない。そこで明石の君の「身の程」を考えると、彼女は明石に暮らす女性であり、都人ではないというだけで、すでに「貴族」とは言い難い。（実際、明石の君の父である明石の入道は、もともとは都人だったが国司としてこの地に赴任してきて、そのまま土着してしまったという設定である。そしてそもそも「国司」自体、貴族ではなく官僚と理解すべき地位である。）これに比べて源氏は賜姓の臣下であり、そうなる前はれっきとした皇子だったわけで、あまりにも身分が違いすぎる。一時的に地方に流謫の身であった源氏が都へ召還されるとなれば、本来なら身を引くというより捨てられても当然のことなのだ。

問4 「形見」という言葉の意味を正確に理解してあるかどうかがポイント。現代語ではもっぱら「親しかった故人の残したもの」といった使い方がなされるが、それはむしろ「親しかった故人を思い出すよすが」ということだったのであり、もっと遡ると本来は「何かを思い出すためのよすが」の意味で、特に故人に限らず過去のこと一般につながる物事を指すものとして使われた。たとえば、旅にある人にとって、世界に一つしかない「月」は故郷（である都）で見たものと同じだから、「月は都の形見」などとも言ったのだ。

とすれば、「この琴は、次に会うときまでの『思い出のよすがに』」と言うのだから、「あなたに預ける」程度のことが出ればよい。人間関係を表しきれはしないが、「ここに残して行く」といった表現でも許容解となるだろう。

問5 ① 傍線部より少し前に「言ふ方なくめでたき御ありさまにて」とあり、ここには接続助詞「て」が用いられているが、これは《単純接続》なので主語はその前後で変わってはいないと見てよい。とするともう少し遡って「年ごろの御行ひに……」と共通の

主語と見ることができ、傍線部の主語は「光源氏」となる。文中に「入道」が出てくるので主語をこれと勘違いしがちだが、ここの主語はあくまでも源氏である。彼は流謫の身であり、みずから謹慎の気持ちを忘れないために勤行に精を出していたのである。そうでなくとも、当時の上流社会では、出家・在家を問わず、仏道修行は生活習慣の一部である。往事の日本人がほぼすべて仏道のパラダイムの中に生きていたことを忘れては古文は半分も読めない。

② 出題者によって「(明石)」と明示された歌の後にあり、かつこの傍線部を含む文の述語が「聞こゆ」と《謙譲語》で表現されている点から見ても、主語は「明石の君」である。

③ 「思ひ聞こゆ」と《謙譲語》で表現されているが、その対象は「入道の宮」すなわち藤壺の中宮である。この場面の舞台である「明石」に暮らす人々が都の中宮の演奏する楽器の音など聞いたことがあるわけがないので、もともと宮中の人であった「光源氏」を採るしかない。

④ 「思ひむす」は「思いのためにむせび泣く」の意である。その原因が「別れむほどのわりなさ」であり、確かに源氏も別れの悲しさを感じてはいるだろう。しかし、源氏はゆくゆくは明石の君を都へ迎え取ろうと考えているのに対して、明石の君は源氏の言葉を「なほざりに頼め置くめる(22行目)」と当てにならないものと思い、諦めなければならないと思っている(傍線部(a))。別れの辛さを「わりなさ」とまで強く感じるのは「明石の君」のほうだろう。

問6

(1) 設問に言う「待遇表現」とは、とりもなおさず「敬語表現」のことである。そこで源氏と明石の君の言動に用いられた敬語について見て行くと、源氏については傍線部③で藤壺の中宮を対象とする謙譲語が用いられるのを除けば、一貫して《尊敬語》のみで待遇されている。これに対して明石の君には文中に一度も尊敬語が用いられず、敬語が使われるとすれば常に《謙譲語》である。字数制限からあまり細かいことは説明できないので、「源氏=尊敬語、明石の君=謙譲語」という違いが明確に述べられていればよい。

(2) 《尊敬語》が《行為の主体(その敬語に対する主語)となる人物に対する敬意》を示すのに対して、《謙譲語》は《行為の客体(その敬語に対する連用修飾語)となる人物に対する敬意》を示す。したがって、この文章では(先に見た藤壺の中宮に対する敬意を除けば)一貫して光源氏に対する敬意のみが示されていることになる。ここで気を付けたいのは、古文の《謙譲語》は「主体のへ

りくだり・謙遜・卑下」を示す言葉ではないということ。したがって作者の明石の君に対する態度は、決して「見下げるべきだ」といったものではなく、単に「わざわざ表現上の敬意を払う必要はない」と考えるべきだ。

二人の登場人物に対する作者のこのような意識の違いの説明としては、「源氏は尊敬すべきだが明石の君は尊敬の必要がない」といった方向性も一応は考えられるが、これでは「敬語の機能の説明」に過ぎない。それなら、枝問(1)で既に説明が済んでいる。ここでは、考えを一歩深めて、そのような考えのもとになる作者の基本的態度として「二人の身分差の表示」にふれることが要求されていると見るべきだろう。

問7　まず、明石の君を誉めていると判断してよい表現を順に列挙しよう。

1　さやかにもまだ見給はぬ容貌など、いとよしよししう気高きさまして（1～2行目）

2　めざましうもありけるかな（2行目）

3　さるべきふしの御答へなど、浅からず聞こゆ（11行目）

4　忍びやかに調べたるほど、いと上衆めきたり（15～16行目）

5　これは、あくまで弾き澄まし、心にくくねたき音ぞまされる（18～19行目）

6　この御心にだに、初めて、あはれになつかしう……飽かず思さるる（19～20行目）

このうち、1は「よしよししう気高き」が文句なく誉め言葉である。

2は源氏の心中思惟なので間接的な表現である点で劣る。

3は嗜み深さを述べてはいるが、貴人に対する態度としては当然とも言える。

4は「上衆めき」が誉め言葉である。「～めく」は「まるで～のようだ」というのだから「実は～ではないが」といった意地悪な読み方もできなくはないが、明石の上が貴族でないことは承知の上なのだから、それにもかかわらず貴族のような高貴さを持っているというのは、素直に誉め言葉と取るべきだ。

5は直接的には「（琴の）音」の描写であり、演奏者である明石の君に対する誉め言葉としては間接的な表現になる。

6は5に直接続く表現であるとともに、演奏を聴いた源氏の反応である点からしても、やはり間接的な表現になっている。

したがって1・4を採るが、1の「さやかにもまだ見給はぬ」は源氏から見ての説明であって明石の君その人の説明ではない。

また4の「忍びやかに調べたるほど」も、それ以外が粗野であるような表現があるわけではないので、わざわざ限定する必要はない。したがってこれらを外して、明石の君に直接的に言及している部分だけを答えればよい。

問8 ㈠「年ごろ」も「行ひ」も代表的な古今異義語である。「年ごろ」は「数年間」・「数年もの間」・「（ここ）数年来」とさまざまなニュアンスで用いられるので、文脈に即した訳語の選定に注意。また「行い」は「行なふ」の《転成名詞》だからもちろん「行為・行動」の意味もあるが、古文入試問題で問われるときは、とくに限定のない限り「仏道修行」・「勤行」と考えてよい。ここでは尊敬接頭語「御」があるので訳し落とさないこと。

㈡「ゆかしがる」は形容詞「ゆかし」の動詞化したものである。「ゆかし」は動詞「行く」と派生関係にある語で、「気持ちがそちらへ向かいがちな心理状態」を示す。ここでは後に「音」とあるので、「ゆかしがる」で「聞きたがる」の意となる。《尊敬語補助動詞》「給ふ」を伴うので、「お～になる」の形で訳出する。（「お～なさる」の形は、現代語としては勧められない。）主語を補うことも一度は考えるべきだが、ここでは傍線部を含む文に「この」と示されているので、補充の必要はない。また「物」は《朧化表現》で、文脈的に明らかなものを漠然と指している。ここでは続く「音」から、この場面で「音」を発するものとして「琴」と特定できるので、「なにか」などと訳しても減点されるだけである。

㈢「心やまし」は「心＋疾まし」の合成語。「疾まし」は動詞「疾む（病む）」と派生関係にある語で、「心やまし」は本来は「不愉快だ・癪に障る」といった意味だが、明確に否定的でない場合にも用いられて「気がもめる」といったニュアンスをもつことも多い。ここでも、明石の君の達者な琴の演奏ぶりについての表現だから、後者で考えるべきだ。これは、ちょっと聞いただけで並の腕前ではないとわかる明石の君が、琴を「弾きさしつつ」つまり何度も弾いてはやめ弾いてはやめしていることをじれったく思っていることを示している。（「弾いてはやめ弾いてはやめ」というのは、別に意地悪しているのではなく、遠慮がちな様子を示しており、これも分を弁えた明石の君の奥ゆかしさを意味しているものと理解すべきである。）とすれば、「気がもめる」では誉め言葉として消極的すぎるので、もう一歩踏み込んだ表現が相応しい。また「ほど」は「程度」のある名詞一般のかわりに置かれうる語なので、毎回毎回前後をよく考えて、安易に「程度」でごまかさない姿勢が大切だ。ここでは明石の上の演奏を聴いている源氏の心情に関する表現なので、「～という感じ」程度の訳語を当てておけばよい。

L3J
東大国語

Z-KAI

会員番号	

氏　名	

不許複製